中学生用自己価値の随伴性尺度の作成¹⁾

大谷 和 大

大阪大学大学院人間科学研究科

中谷 素 之

大阪大学大学院人間科学研究科

問 題

青年前期にある中学生は、自我を発達させていくうえで多くの危機に直面し（長尾，2002），不登校やいじめ，抑うつなど，適応に関わるさまざまな問題を生じやすいことが考えられる。これらの問題には程度の差こそあれ，自己に対する評価，すなわち自尊感情が関わっていると考えられる。このような背景から自尊感情の程度に関する研究が国内外で数多くなされてきた（例えば Brown, 1998）。

しかし近年，自尊感情の高さが必ずしも心理的適応を意味せず，自尊感情を追求する者ほど自尊感情が安定しない可能性が提起されてきた（Crocker & Wolfe, 2001; Kernis, 2003）。このことから，どのような自己の領域で自尊感情を維持し高めているのかという，自尊感情の源となる領域に着目した試みが注目を集めている。Crocker & Wolfe (2001) は，このような自己の領域にどの程度自尊感情もしくは自己価値を随伴させているかについての指標である“自己価値の随伴性”を概念化し，自己価値の随伴性が実際の行動や動機づけ，さらには心理的適応と密接な関わりを持つことを指摘している。

人は，自尊感情が随伴する自己の領域では，自尊感情を追求したり，防衛したりするよう動機づけられる（新谷・クロッカー，2007）。当該領域内における成功・失敗などの出来事は，自己価値の有無の指標となることから，自尊感情が変動しやすく，抑うつなどにつながると考えられ，自己価値の随伴性が適応を阻害する可能性が示唆されている。実証研究においても，自尊感情を学業領域に随伴させている学生は，勉強に努力するものの，学業が主なストレス源となり（Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003），学業失敗が自尊感情の脅威となることが見出されている（新谷・クロッカー，2007）。Kernis (2002) は，青年前期という心理的適応が問題となりやすい時期では，とりわけ自己価値の

随伴性が重要な意味をもっている可能性を示唆している。

ところで，国内外のこれまでの自己価値の随伴性に関する研究²⁾のほとんどは大学生を対象としたものであり（例えば新谷・クロッカー，2007；伊藤・小玉，2006；内田，2008），中学生という自我発達上の危機が高まりやすい発達段階を対象とした検討はほとんどなされていない。よって本研究では，中学生を対象とした自己価値の随伴性尺度を新たに作成し，その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。青年前期という発達上重要な時期における，よりよい適応の理解に寄与する知見が得られることが期待される。

妥当性の検討にあたってはパーソナリティの主要な側面を反映すると考えられる5因子性格検査，特性的自尊感情，および自己愛との関連を検討する。これらのパーソナリティ概念と自己価値の随伴性の関連は，先行研究（Crocker et al., 2003）でも取り上げられており，妥当性指標の重要な変数であると考えられる。

方 法

調査協力者

大阪府内の公立中学校1～3年生357名（男子167名，女子187名，不明3名）を対象に質問紙調査を2007年12月中旬に実施した。

質問紙

1. **自己価値の随伴性尺度** 中学生の自尊感情の領域は大学生と異なることが予想されるため，中学1～3年生98人に行った予備調査結果をもとに，“～だと，自分にほりを感じる”，“～だと，落ち込んでしまう”，“～しだいで，自分に自信をもてるかどうかは左右される”などの自尊感情の変動を反映する項目群を“運動”“学業”“友人”“芸術”の各領域について作成した。“学業”“友人”は先行研究（Crocker et al., 2003；内田，2008）と一致する領域であり，“運動”は原尺度の“競争”と項目内容がほぼ共通する領域である。“芸術”は予備調査で自尊感情に影響する活動として音楽や芸術の活動に関する記述が多く見られ，中学生の自尊感情にとって重要な要因であると考えられるため新たに加えた。各領域4～5項目で構成される全20項目，7件法。

2. **青年前期用自己愛尺度**（中山・中谷，2006）“誇大性”

1) 本研究の一部は，日本教育心理学会第50回総会（2008年，東京学芸大学）において発表された。
2) 自己価値の随伴性には，領域を細分化する立場（Crocker & Wolfe, 2001；内田，2008）と，随伴性という全体的次元として捉える立場（Kernis, 2003；伊藤・小玉，2006）が存在する。本研究は前者の理論的立場に立ち検討を行う。

“過敏性”から構成される18項目、7件法。

3. 小学生用5因子性格検査：FFPC（曾我，1999）
“協調性”“統制性”“情緒性”“開放性”“外向性”から構成される40項目、4件法。

4. 自尊感情尺度（桜井，1997）特性的自尊感情を測定する10項目、5件法。

なお、再テスト信頼性を検討するため、12月中旬の調査に参加した中学生146人を対象に2008年3月上旬に再度質問紙を配布した。その際に自己価値の随伴性尺度および、自尊感情尺度を実施した。

結果と考察

自己価値の随伴性尺度20項目に対して因子分析を行った。固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から、4因子構造が妥当であると判断し、再度4因子を仮定して主因子法・プロマックス回転を行った。因子負荷量が十分な値を示さなかった項目、複数の因子に高い負荷量を示した7項目を削除し、再度、因子分析を行った。結果得られた最終的な因子パターンをTable 1に示す。項目内容について、第1因子は芸術に関する内容であることから、“芸術能力”、第2因子は学業に関する内容であることから“学業能力”、第

3因子は、運動に関する内容であることから“運動能力”、第4因子は友人関係に関する内容であることから“友人関係”と、それぞれ命名した。

尺度全体および下位尺度の α 係数は.71～.82、全体で.83であり、比較的高い内的整合性が確認された。また、3か月間隔での再テスト信頼性も認められた（Table 2）。

さらに、構成概念妥当性を検討するため、既存の人格尺度との相関係数を算出した。誇大性の自己愛は“運動能力”($r=.336, p<.01$)と中程度の正の相関を示した。運動能力の下位尺度は、Crocker et al. (2003)において“競争”とされた項目群とほぼ同様の内容であり、そこで見られた相関関係とおおむね一致するものであった。また、過敏性の自己愛は全ての下位尺度において正の比較的高い相関が見られた。なかでも、“芸術能力”領域において強い相関($r=.760, p<.01$)が見られた。このことは芸術性と情動の安定性の関係を指摘した研究（例えば Frantom & Sherman, 1999）の結果と一致するものであり、本尺度の一定の妥当性を示す結果だと考えられる。同様にFFPCの情緒性とは全ての下位尺度において低～中の正の相関が見られた。

また、自己価値の随伴性と自尊感情との相関係数はほとんど有意ではなかった。先行研究（Crocker & Wolfe, 2001;

Table 1 自己価値の随伴性尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転後の因子パターン）

領域	項目	因子負荷量				
		1	2	3	4	h^2
芸術能力	音楽や美術でよい成績がのこせると、自分に自信がもてる	.853	.063	-.024	-.006	.754
	音楽や美術でよい結果だと、ほこらしい気持ちになる	.827	-.029	.168	-.096	.771
	音楽や美術の成績しだい、自分に自信がもてるかどうかは左右される	.700	.006	-.212	.123	.447
学業能力	テストの点が悪いと、自分に自信がなくなる	.031	.772	.085	-.019	.664
	友だちより頭が悪いと感じると、落ち込んでしまう	.041	.744	.025	-.040	.575
	勉強面で成績がわるくても、気にならない*	-.023	.667	-.040	.094	.465
運動能力	自分の運動神経がみんなより良いと思うと、自分にほこりを感じる	-.013	-.011	.880	-.046	.730
	まわりから自分の運動神経をほめられると、ほこらしい気持ちになる	-.082	-.008	.741	.061	.528
	まわりより自分の運動神経がおとっていると感じると、自分に自信がなくなる	-.025	.274	.490	.036	.417
友人関係	仲間との関係しだい、自分に自信がもてるかどうかは左右される	.062	-.107	.094	.702	.531
	自分を支えてくれる仲間がいないと感じるときでも落ち込むことはない*	-.107	.160	-.150	.646	.420
	自分を支えてくれる仲間がいると感じるとき、自分にほこりがもてる	.068	-.158	.239	.558	.434
	自分には本当の友だちがいないのではないかと感じると、自分に自信がなくなる	.057	.157	-.034	.515	.359
因子寄与		2.83	2.67	2.69	2.28	10.47
M		3.97	4.38	4.17	4.82	
SD		1.40	1.54	1.30	1.20	
α		.819	.781	.761	.705	
因子間相関		I	II	III	IV	
		I	—	.420	.472	.308
		II		—	.421	.354
		III			—	.364
		IV				—

注. *は逆転項目。逆転項目処理後に分析。

Table 2 自己価値の随伴性尺度と関連尺度との相関

尺度	芸術 能力	学業 能力	運動 能力	友人 関係
自己愛, Time 1				
過敏性	.760**	.478**	.358**	.451**
誇大性	.111*	.103†	.336**	-.055
FFPC, Time 1				
外向性	-.105†	-.058	.106†	.139*
協調性	.089	.244**	.150**	.145**
統制性	.159**	.068	.157**	-.022
情緒性	.256**	.395**	.188**	.337**
開放性	.132*	.199**	.145**	.164**
自尊感情, Time 2	.067	-.016	.183*	-.040
再テスト信頼性, Time 2	.619**	.407**	.662**	.455**

†<.10, * p <.05, ** p <.01

注. Time 1 は 2007 年 2 学期後半, Time 2 は 2008 年 3 学期後半の 3 か月間隔で行われた。

Crocker et al., 2003) でも自尊感情との関係は無相関もしくは弱い相関がある程度にとどまっており, 自己価値の随伴性と自尊感情は比較的独立的なものと考えられている。本研究の結果もこれとほぼ同様のものであり, 今回作成した尺度が一定の妥当性をもつことが示唆される。

以上の結果から, 本研究で作成した中学生用自己価値の随伴性尺度は, 一定の妥当性と内的整合性および再テスト信頼性を有する尺度であることが確認された。今後, 特に心理-社会的な発達上の危機がしばしば指摘される中学生を対象に, よりよい心理適応の理解に向けた研究が蓄積されることが望まれる。

引用文献

- Brown, J.D. (1998). *The self*. Boston: McGraw-Hill.
- Crocker, J., Luhtanen, R. K., Cooper, M. L., & Bouvrette, S. (2003). Contingencies of self-worth in college student: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 894-908.
- Crocker, J., & Wolfe, C.T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- Frantom, C., & Sherman, M. F. (1999). At what price art? Affective instability within a visual art population. *Creativity Research Journal*, **12**, 15-23.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主體的な自己形成を支える自己感情の検討——本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—— 教育心理学研究, **54**, 222-232.
- Kernis, M. H. (2002). Self-esteem as a multifaced construct. In T.M. Brinthaup (Ed.), *Understanding early adolescent and identity*. NY: State University of New York Press. pp. 57-87.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 1-26.
- 長尾 博 (2002). 青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程 発達心理学研究, **13**, 295-306.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.
- 新谷 優・ジェニファー クロッカー (2007). 学習志向性は失敗が自尊心に与える脅威を緩衝するか 心理学研究, **78**, 504-511.
- 桜井茂男 (1997). 現代に生きる若者たちの心理: 嗜好・性格・動機づけ 風間書房
- 曾我祥子 (1999). 小学生用 5 因子性格検査 (FFPC) の標準化 心理学研究, **70**, 346-351.
- 内田由紀子 (2008). 日本文化における自己価値の随伴性——日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検討—— 心理学研究, **79**, 250-256.

—— 2008.10.10 受稿, 2009.9.17 受理——

Development of the Contingencies of Self-Worth Scale for Japanese Young Adolescents

Kazuhiro OHTANI and Motoyuki NAKAYA

(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2010, Vol. 18 No. 3, 233–236

The Contingencies of Self-Worth Scale for Japanese Young Adolescents assesses the domains which comprise young Japanese adolescents' sense of their self-worth. Exploratory factor analysis revealed four domains of self-esteem sources: artistic competence, academic competence, athletic competence, and peer relationships. All subscales had high internal consistency and test-retest reliability. In addition, all subscales showed low to moderate correlations with other personality scales, including the big five factors and a narcissistic personality inventory, but not with the Rosenberg self-esteem scale.

Key words: contingencies of self-worth, self-esteem, young adolescents, scale development